

「2019 インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2年 若杉美佳

今回のプログラムでは、主としてインドネシア語の学習を行った。毎朝9時から100分間の語学の授業が2コマあり、配布された教科書に沿って授業が進められた。挨拶、道案内、人物の描写、食事の際に使う言葉、交通機関など、日常で頻繁に使われる言葉を中心に学習することとなった。日常会話を中心に学んだことにより、二週間インドネシアに滞在するなかで、実際にインドネシア語で会話をしたり質問したりすることができた。簡単な会話しかできないのだが、積極的に言語を使うことができたと思う。宿泊先の従業員との挨拶や、食堂で注文するときの会話、ゴジェックという名前のバイクタクシーの人に行き先を教えるときなどに、授業で学んだことが活かされた。言いたいことがうまく伝わるときもあれば、伝わらないときもあったが、実践的に会話を行えたことは非常に良い経験となった。インドネシアの本屋で、日本語とインドネシア語が対応している紙辞書を購入したので、今後のインドネシア語学習に役立てていきたいと思う。

また、授業の一環としてインドネシアの文化体験もさせていただいた。パティックという染物の体験や、アルンバやガムランという楽器の体験も行った。私はインドネシアの民族舞踊に興味を持っていたので、個人的にインドネシアの民族舞踊の部活動に参加させていただいた。インドネシアには数多くの地方や文化があるのだが、その中からスダ地方の踊りをインドネシア大学の学生たちと一緒に踊り、とても楽しい時間を過ごすことができた。

インドネシアはムスリムが多い国である。大学内でも街中でもヒジャブを被った女性をよく見かけ、一緒に行動していたインドネシア大学の学生が「お祈りに行く」と言って時々いなくなる場面に度々見合わせていたが、自分が異文化圏のなかにいるという意識があまりなかった。インドネシアにおいて自分が圧倒的マイノリティであることを自覚した場所が、休日に訪れたイスティクラルモスクである。ジャカルタに位置するこの建物は、世界最大級のモスクであり、建物の中にいる女性は、小さな子供から年配の方まですべての女性がヒジャブを被っていた。ヒジャブを被っていない女性は私だけであった。それを認識したとき、何の信仰も持たない自分が、この場において異質な存在であることを自覚した。日本では感じたことのない宗教的マイノリティの感覚をここで掴むこととなった。ただ、モスクは開かれた場所であり、ムスリムでない人でも自由に立ち入っていい場所であるということを教えてもらった。ムスリムでない自分が入ってもいい場所なのかとためらいつつ連れてきてもらった場所なのだが、このモスクを訪れることができてよかったと思っている。

インドネシアでの二週間、インドネシア大学文学部日本語学科の学生が京都大学の学生のサポートをしてくれた。彼らとの会話は、主として日本語を用いて行われた。彼らと話すときには普段よりゆっくりと話すことや、用いる単語を簡単なものとすることや、標準語を使うことを心がけた。わからないと言われた単語の言い換えを探したり日本の文化に特有なものを説明したりすることはなかなか難しく、自分の日本語の言葉に対する意識がまだまだ低いことを反省することとなった。インドネシア大学の学生と関わる中で感じたことは、インドネシアの人々は家族や友人との関係を非常に大切にしている人々だということだ。日本の学生は下宿先に帰ることを「家に帰る」ということがよくあると思うが、インドネシアの学生にとって「家に帰る」とは実家に帰ることであり、下宿先に帰ることを家に帰るとは言わないそうだ。食堂の様子を見ていても6人から8人ほどのグループで食事をしている人たちがばかりで、一人で食事をしている人をほとんど見かけなかった。インドネシアの人々の人間関係を、二週間生活する中で感じるができ、様々なことを現地で実際に体感することができるというのがこの派遣プログラムの良さであると思う。インドネシア大学の学生たちには、非常によくしてもらって感謝している。今回のプログラムによって新たにできた人との繋がりを大切にしていきたい。